

だれのための共同体か

制作部／上野允士



共同体同士の連帯の範囲が
広がりつつある。それは、
いったい、どんな方向を目
ざし、だれのためのものな
のだろうか？

「第四回日本の共同体話し合いの会」が、去
る一月二七日より三日間、前回の一燈園か
ら会場を三重県の山岸会・春日に移して開催
された。山岸会の人々を中心に、一燈園、大
倭紫陽花邑、船南農園、厚木振出塾からの参
加者があつた。常連の渡辺貫二氏(新しき村)
は用事のため、志渡勇一氏(東山産業)は、病
気のため、それぞれ欠席された。なお、この

話し合いの第二日目の午後には、まだ二年半の
歴史しかもたない若い雰囲気をつたえたヤマ
ギシズム豊里実顕地を見学する機会を得た。
この会の議題としては、前回の話し合いで提
案されていたものと、この会合へ向けてのア
ンケートの結果とをあわせ、創始者、提唱者
の思想と実践をどう受けついでいくか、共同
体の機構の問題、経済面からみた共同体成立
の条件、現代社会における共同体の意義等が
準備されていた。議事のおおまかな進行は以
上にあげられた議題にそってなされていった。
実際の話し合いは必ずしもこの議題のわくどう
りには行なわれなかったが、これらのテーマ
は、そのひとつひとつが、共同体運動を展開
していくうえで避けていくことのできない問
題であると思う。その主な経過は、以下のレ
ポートで報告するとおりである。

現状報告

まずはじめに、ここ数ヶ月間の各共同体の
動静や問題点を明らかにしてもらうために、
現状報告が行なわれた。

「月刊キブツ」12月号ですでに報告された
「第一回共同体青年交流の会」に関しては、
上野允士と杉本順一氏から報告がなされた。
これに対しては「予期したような成果があつ
た」(原川氏)、「この会合を契機として日常
的な動きを作りだしていくべきである」(飯
河氏)等の感想が出された。

山岸会の榎並春義氏は、この会合にはじめ
て出席した人の一人だったが、ヤマギシズム
神戸実顕地がめざすものを語った。——「ヤ
マギシズム革命をさらに拡大するためには、
一体生活を第一二次産業の分野に限ること
なく、大都會の生活を通して、一体生活が
実現できなくてはならない。それを目標とし
て、神戸実顕地では小規模ながら都市の一
体生活を追求していくつもりだ」

本誌上においても数度にわたって呼びかけ
の行なわれてきたブラジルコミュニティについ
ての報告は、前田英雄氏よりなされた。——

「このコミュニティ建設計画は、さらに進展し
二月二四日には第一グループ(前田氏を含め
て三名)が、いよいよ横浜からブラジルへ向
けて出発することになった。現在、入選が進
んでいる第二グループも、六月から一〇月の
あいだに出発する予定である。現地では、山
岸会式の養鶏を中心に生産の基礎を築く。ヤ
マギシズムの拡大は、まずブラジル在住の日
本人を対象にした特講をひらき、現地日本人
のなかから、ヤマギシズム思想の共鳴者を獲
得する。それを経て、現地語による特講を行
ない、国際的な規模での運動を目指していく。
これと平行して、教育程度の低い現地で学校
を作る構想も練りつつある」

さて、今回の会場となった山岸会・春日に
ついては、川瀬敏詮氏から報告があつた。——
「最近の目立った動きとしては、外部から
の若者の参加が多かつたことが挙げられる。
五〇名を超える若者が特講を経て実践生活に
入つたり、各地の活動場所へ散つていった。
勿論この増加の事実、ヤマギシズム思想の一
定の拡大を意味していることであり、よろ
こばしいことである」

磯良宏氏は、豊里実顕地について語って
くれた。——「ここでは養鶏が中心であり、現在

参加者

- ▼山岸会(春日)
内藤 謙 奥村和雄
前田英雄 川瀬敏詮
- ▼ヤマギシズム生活豊里実顕地
磯 良宏
- ▼ヤマギシズム神戸実顕地
榎並春義
- ▼ヤマギシズム大阪連絡所
松並憲三夫婦
- ▼一燈園
原川義雄
- ▼大倭紫陽花邑
飯河四郎 杉本順一
- ▼船南農園
奥村久雄
- ▼吉田光雄
- ▼日本協同体協会
上野允士 岸田 哲

九〇名が生活している。だが、山岸会では実蹟地の適正規模を二〇〇名と考えているので、現在のままでは小規模すぎる。このことを課題とし、将来は二〇〇名が生活できる規模の豊里を作っていくたい。また、各地に散らばっている実蹟地は、規模も小さくお互いまとまった活動もしていないので、豊里としては各実蹟地間の連絡交流の働きかけをしたいと思っている。

この会の常連である原川義雄氏は、一燈園の現在の課題について報告した。「一燈園は、今や序々に第二世の時代になりつつあるが、西田天香氏の指導を直接に受けた人たちが生存しているあいだに、しっかりとした組織作りをする必要性にせまられている。天香氏の教えが十分に生かされるような組織を作るためには、一―二年を要するかもしれない。また、数は山岸会に比べずっと少ないけれど、一燈園にも何かを求めてここを訪れてくる若者たちがある。これまでは、このような若者たちの受入れ体制が整っていたとはいえないが、今後こうした問題についても考えていきたい。」

共同体としては、他の共同体とはその形態においてかなり異っている船南農園の課題に

割を果たすようになることを恐れたのです。そして、教祖と指導者という形で受けとられんように気をつけましてね。〈先生〉とも決して呼ばせませんでした。一度〈先生〉と呼んだら一〇円罰金を払うという制度を作ったりしてね。そやから会合なんかあってもめったに上の方には座りませんでした。いつも末席ばかりでしたよ。昔は、山岸会では会長のようなものがおったのですが、たいがいの人にはね、山岸さんが会長だと思っていました。でもあの人はいちども会長職についていたこととはありません。その後、会長制度がなくなつて総務制度がとられるようになったのですがね、それでもあの人は役職につくことはありませんでした。」

次に、一燈園の創始者西田天香氏について原川義雄氏が語った。

「天香さんの生きておられたころは、なんでも天香さんの言われたとおりのことを、ハイハイという実行するようになつていたので、組織と呼ばれるようなものは、天香さんが亡くなられた当時はありませんでした。勿論、なにをするときにでも天香さんはみんなに相談をもちかけてきましたけれど、それでも天香さんの言われることに対して反対し、

ついで、奥村久雄氏より発言があった。「ここでは、既存の村のなかで共同体を目指す船南農園の四家族が、どういう生活の基礎を作っていくのが最大の課題としてある。なにもないところに共同体を作ることよりも、既存の村の中から共同体をはじめていくことのうちにより多くの困難があると思う。」

主なところからは、以上のような報告があった。杉本順一氏からは大倭の報告があったが、大体のところは、「共同体青年交流の会」で報告されたことと重なるので、ここでは紙数の都合上、省略することにした。

創始者たちについて

山岸会には山岸已代蔵、一燈園には西田天香、大倭紫陽花邑には矢追日聖、心境農産には尾崎増太郎というふうに、それぞれの共同体にはその創始者あるいは提唱者と呼ばれている人々がいる。この創始者たちは、どのようなイメージで受けとめられているのか？この会合で語られたことばを拾い集めてみることにしよう。

山岸会の内藤氏は、山岸已代蔵氏に始めて出会ったころの思い出を次のように語ってく

それはどうかと思いますというふうなことを言うことはありませんでした。天香さんも、山岸さんや矢追さんと全く同じでしてね、〈先生〉と呼ばれることが大嫌いでした。天香さんと呼ばれるのがいちばん落ち着くと言われて、私たちもそう呼んでいるわけなのです。それから、人に説教するという態度を絶対にとりませんでしたね。礼堂でみんなの前でお話をするときにも、対話をするという形式はとりませんでした。私どものところへ来られた方はすでにご存知でしょうが、ここでは偶像はおいけませんので、ただ正面に丸い窓が作ってあるだけです。天香さんはこの部屋のいちばん下に座られて、窓から入ってくる光に向かってお話をするという形をとりました。私どもは、男と女とが両側にわかれてむかいあって座ります。私どもは宇宙の真理のことを光と呼んでおりますが、この光へむかって、たとえば天香さんが旅行してこられたらこんなことがあったとか、こんなものを見たとか、それで自分がどんなことを感じたとかいうことを、この光にむかって報告されました。それを私どもが横に座っていて聞くという形をとったのです。天香さんは、自分はまだ黙って実践している、そして自分につい

れた。

「ぼくがはじめて山岸さんを知ったのは、京都の一燈園やったがね。養鶏の会合があったんやけど、その会合のなかで山岸さんがどの人なのかどうしても分かりません。ふつうの常識で考えればね、山岸さんがこの会合の中心なんやから、だれかが山岸さんを紹介してやね、山岸さんのお話があつてもいいはずなんや。それでもぼくは、結局最後まで山岸さんという人がどの人なんか分からんね。それじゃあ話にならんちゅうて、仕方がないからとなりの人にどの人が山岸さんですかと聞いたんや。そして、いちばんケツに座っている人がそうやいんやね。ぼくはそのとき、まあ山岸さんという人はなんと変わった人やろうと思いました。それから、たびたび山岸さんと同席したことがあつたんやけど、いつでもいちばん下に座つていてね、自分が目立たないようにしていたということ、決して人の上に立つことがないようにと氣を使つていられたということもいつも感じましたね。」

内藤氏と同様、山岸会の古いメンバーの一人である前田氏は、次のように語る。

「あの人はできるだけ文章を残さんように努力した人なんですわ。文章が教典のような役

てくる者はついてくれればいいという態度だったのですね。去る者は拒まぬという態度でした。そして、いろいろな意見に対して肯定も否定もされんのです。自然の流れのままに生きていくという立場でした。上に立つ人がいつでもいちばん下座しなければならんということもいつも言つておられまして、自分でそれを実行しておられたわけです。」

第二日目からこの会合に参加した厚木振出塾の原康男氏は、心境農産の尾崎増太郎氏について、

「私は三年ほど心境で尾崎さんといっしょに生活してきたのですが、あの人について言えることは、どのような場合にも自分中心にはものを考えていないということですね。自分のことなんか、いっさい考えてはいないのです。ですからね、心境でもいわゆる多数決で何かを決めるといふ形ではなく、ほとんど尾崎さんが一人で決めるといつてもいいほどのことです。彼の考えていることがいつも他人のことなんです。本当にその人のことを思っているのです。結局、私たち自身のことを、私たち以上に、反対する余地がないほど深く考えているということなんです。この点では、法主さん（矢追日聖氏のこと）にしろ山

岸さんにしろみな同じです。安心してその人といっしょに生活していけるという気持ちを入に与えるのです。」と語ってくれた。

ここから推測できることは、創始者の一面にすぎない。それでも私たちは、これだけのことからでも、創始者自身の性格のなかにも多くの共通性の含まれていることを知ることができる。明らかにキプツの発生の仕方とは異なるこの日本の共同体の特徴を、その創設者たちの共通性を探っていくことよって明らかにしていくことも可能である。さらに、日本の共同体をキプツとの比較で考えるとき、創設者の個性がその共同体の個性に強い影響を与えていると指摘することができる。

山岸会への問いかけ

山岸已代蔵氏が提唱者となつてははじめられた山岸会に関しては、これまで多くの出版物によつて紹介されてきたし、本誌上においてもくりかえして取り上げられてきているので、ここであらためてそうした説明をするのは避け、出席者が会合のなかで発した質問や意見に焦点をあわせてみることにした。

会場となつた春日山の本部、それに各地の

実蹟地、試験場、さらには特講を受けてヤマギシズムの考え方に触れていった人々の数をあわせれば、山岸会が日本最大の規模をもつ共同体であり、かつそれは外部からの若者を吸収しつつ拡大している日本の代表的共同体であることは、いうまでもない。

問—山岸会では、中心になる人間はいないといいますが、その点に私どもも外部から来た人間にはなにかつかめぬものがあるのです。いわゆる権力を掌中におさめて他人を支配するという意味の指導者ではなく、山岸会の精神に反することのない中心的な役割を荷っている人がだれかいると思うのですがいかがでしょうか？

答—山岸会の精神がつかみどころがないということ、そのとおりだと思います。私たちはなにかをつかむことを警戒します。中心となるような人間は、私どものところにはおりません。思想・人物にすぎること避ける方向でいくことなのです。なにかがあると、それが無くなったときにはどうなるでしょうか。また、なにかがあるとそれを守らねばならないようなことが起こってくる。そうしたものは私たちは警戒するのです。

問—現在山岸会では、特講・研鑽学校等の独自の方法で、外の社会に対しての働きかけを続けているわけですが、このような考え方はすでに山岸氏自身の中にあつたことなのでしょうか？

答—ええ。決して自分の考えを押しつけるということではなくて、こういう考え方はどうだろうかといつて他人といっしょに考えようとする姿勢はありました。この「これはどうだろうか」と他人に問いかけるやり方は、受けとり方によっては非常に自分の意志を持たずにいるようにも感じられるのですが、決してアイマイなものではなく、山岸氏はこのヤマギシズムが本当の考え方なのだという信念を持っていたと思います。一日も早く世界中の人にこの考え方を知ってもらいたいという願いを持っていたということを感じました。単にこれはどうだろうかという軽い気持ではなく、もつと熱烈な気持でそれに命をかけていたとも思えるのです。

問—さきほど、指導者、中心になる人間は作りだしていないといわれましたが、やはり現在のシステムがヤマギシズムの運動を進め

ていくなかで、ある種の指導者層を作りだしているのではないかと思います。

栃木に、「キプツ那須農場」というのがありますが、これはヤマギシズムの首都圏実蹟地という形で進められていました。そこへこの春日からも人が行つたのですが、農場の名称をヤマギシズム那須実蹟地としてほしいという強い要望が出されたのです。それで、那須農場の印南氏が、今後実蹟地として行くかどうかというところで決断をせまられていたのですが、結果的には実蹟地としてはやっていけないということになったわけです。で、この過程で、やはりヤマギシズムを進めていくうえでこのひとつの固さがあつたように思うのです。

これがひとつの例としてあるのですが、いわゆる実蹟地としての看板をかかげて始めたほとんどのところが壁にぶつかっています。で、そういう人たちが集まって、どうしてもヤマギシズムのシステムの中だけで進んでいく行き方を突破しようという意見があつて、「全国協業経営体連合会」(月刊キプツ)で「概報」という名称をつけて連合体を持ちまして、あらゆる協業体、共同体との関係をもつて進めていくということになつたのです。

これは山岸会と対立するものでは全然なく、そのワクをはずしていっしょにやつていこうという運動なのです。まあ、こういった点を見て、現在の山岸会に受けつがれているシステムが非常に強いものとしてあるのではないかと思うのですが、いかがでしょうか？

答—たしかに、研鑽をしてみても、現象面がそれに伴っていないところがあるんです。実蹟地がうまくいかなかったという例はいろいろな場所で見えています。今までずいぶん失敗していますわ。ただ、そうした側面を見て、これがヤマギシズムなのかと断定されてしまうと困ります。どんな社会でもいろいろな人がおります。すべての人が完全というわけにはいかないのです。私たちのシステムは決して完全なものではないし、これでも十分なものではないならば、みんなだ検討しあつて直していきたいと思えます。

私たちの目指している世界が実現するため、現状のままでは会社や村が仲良しの組織体にしていくことが私たちの目的です。今日ここに集まっていることの理由も、結局はそこにあるのだと思えます。私たちの提案を他に検討してもらつて、自分たちの考えたことを広めていくという姿勢がないと、やは

り自分に対して偽りでないかと思うのです。拡大こそが仲良くなるための唯一の方法であると考え、山岸会ではそれが一定の成果をあげていると思えます。

問—大俣の矢追日聖氏は「多色彩一体」をいいます。山岸会のいう一体は、すべての人間を同じ型のなかにはめこもうとしているようにも感じられます。必ずひとつの形にはまらない人間がいます。ぼくは、共同と一体と内容的な相違を感じません。両方の目指すところは同じだと思えます。やはり、生活のなかで受けとつたもので語りあつていかねばならないと思えますが……。

答—「共同体」ということばが使われていますが、私たちは山岸会を共同体だと思つていません。私たちはこれを一体社会と呼びますが、理論的に共同と一体のちがいをうたつています。私たちは、和をひろげひとつの円がこの地球全体を包みこんでしまおうという方法でやっています。全体がひとつになつてしまえば、「共同体」といった名称はなくなつてしまふと思えます。

こうした話し合いを続け、春日や豊里を

地に見学することを通して、私たちは山岸会についてより深く理解することができたと思う。最終日の感想のなかでは、「私にとって待望の山岸会を訪問できたことをうれしく思います。やはり書物や人の話では得られないものが現実ここにきてみて得られたと思います。」(飯河氏)、「百聞は一見にしかずということを感じました。山岸会に寄せていただいたことを非感に感謝いたしております。」(原川氏)、「ここはほくが死にもものぐるいでたうちまわったところです。道ひとつひとつ、家ひとつひとつ、あう人ひとりひとりがなつかしく忘れられないものです。自分の家だという気持があるのです。」(原氏)といったことばで表現されていた。

共通性の発見

この三日間の話し合いを通して感じたことは、もし共同体を自分自身のために学びたいのなら、その形態を通してではなく、創設者の生き方を通して学ぶべきだということだった。共同体へのアプローチが、その機構や形態の研究、あるいはその欠点をほじくりだすことにあるのならば、ほくはほく自身のためにそ

のような方法には意味がないと思う。

真に訴えかけてくるものは、ことばではなく実践者の姿である。そしてその実践者のうち当然のことながら、ほくらの心を捉えるものは、始めた人々、何も無いところから一歩一歩現在の形を作りあげてきた人々の姿である。例えば、山岸已代蔵氏は、人間は平等であると考えていたとか、指導者を作りださないようにしようと考えていたと誰かから説明されてみたところで、いったいだれの心の中に興味を生じさせることが可能だろうか？山岸会の人々が語ってくれた山岸氏の思い出は、彼の人となりを示すごく小さなエピソードにすぎないけれど、ほくはこのとき、創始者の生きた姿に接することによって、その人間的な接触を通して学ぶものがいちばん大きいのだと思った。この点をさらに具体的に示唆したものに、厚木振出塾の原氏の発言があった。彼は、自分が新しいものを作らねばならぬと言った。「共同体の創設者たちから学ぶべきことも貴重なものは、そのスタイルを受け継ぐことにあるのではなく、自分の人間性と自己に内在するものを見出し、それを生かしていくことの中にあります。西田天香氏は一燈園を創った、矢追日聖氏は大倭紫

陽花邑を創った、尾崎増太郎氏は心境農産を創った。これらの人々は、決してだれかの作ったものを真似てそれをはじめたのではなく、個別な環境のなかから独自に現在の共同体を築き上げてきたのである。このような視点に立てば、第二代目とは創設者その人以下の生活を行なっているにすぎない。」このような原氏の指適にいちいち目をとがらさなければ、我々はこのことばのうちに含まれている我々の在り方への提案があることを理解できるのではないだろうか。

「共同体話し合いの会」への参加は、ほくにとつて始めての経験だったが、コミュニケーション(伝達)の手段としてのことばの使われ方に、日常的な自分の世界のことばの使われ方とはかなり異質なものを感じた。例えば、ほくらがふつうに自分の生き方だとか社会・政治について語りあうとき、そこで交わされることばは、もっと明確なびびきをもち、狭く規定された意味あいを含んでいる。いわば、語るものことばへの信頼というか、自信に裏打ちされたものとしてそれはある。だが、ここではそうではなかった。山岸会には、一流の論法があつて、決して断言するという形を取らず、ひとつの解釈さえもが、変化、流動

する可能性を含んだものだという点が強調される。そのために発言のなかではしばしば、「本当はどうか分かりませんが……」、「捉えようと思つても捉えられないものではないのですが……」、「何々ではないかと思うのですが……」等々の表現が使用される。この姿勢を、ほくは山岸会だけではなく、多少の程度の差こそあれ、他の共同体の発言のなかにも感じた。ここでは、断定的な表現、相手を決めつける態度、自分の意見を絶対的なものとする態度がほとんどないのだ。もし共同体の実情について全く見知らぬ人が、この論法によってのみ判断しようとすると、共同体とはなんとあやふやな訳の分からぬところだろうかと感じるに相違ない。だが、ここで理解すればよいことは、我々を表現する手段としてのことばに絶対的な価値をおいてはならないということなのだ。ことばでのみ判断するのではなく、そのことばが発せられたときの気持、その表現のうらがわで希望し、志向するものが在るということを知る努力が要求されている。このことを知ったことは、ほくにとつてひとつの収穫であつた。

我々が共同体あるいは共同体運動と名づけているものにはつきりした輪郭を与えるためには、ことばによるその定義づけを急ぐのではなく、これら共同体の共通性の発見に努めることによって、その特質をより明確にすべきである。たしかに、日本の共同体は別々々人々の手によって個別な条件のもとで生まれてきた。しかし、この会合に出席してのもうひとつの印象とは、この別々な共同体がいろいろな点においてきわめて似かよつた性格を備えているということであつた。こんなことは、いまさらあらためて言う方がおかしいということにもなりそうだが、これまで漠然と「日本の共同体」と呼んできたものが、あらためてほくのままでより明瞭な輪郭を伴つて浮かびあがってきたのだ。この共通性を我々から共同体運動に関心を示そうとする者が自分の内部でしっかりと捉えておくことは、いわば無差別的に多くの事例を含みこみつつ呼ばれてきた「共同体」というものの内実を明らかにし、自分のなかでの共同体像を結晶させていくうえで役立つかもしれない。我々はここに「だれのための共同体か？」という問いを設定しようと思う。この会合での発言をひろいあげ、共同体の活動の現状を

見ることによつて、共同体の眼がある方向をむいていることを明らかにすることができからである。この問いに対して、「無能者のため」と答えたのは原氏であり、「学校の成績でいえば一点や二点しかとることのできな社会不適応者のため」と答えたのは飯河氏だ。これらは、「だれのための共同体か？」という問いに対する簡潔な得た解答であると思う。大倭紫陽花邑の発生の事情を調べると、この点があはつきりする。この邑の発生は、法主・矢追日聖氏の終戦直後の布教活動から始まっている。「ここに来た人は救いを求めてやってきた人ばかり、社会の底辺にいた人ばかりです。裸で来るとか、しらみを下けてくるとか、私苦しいからどないもありません」といったのが来るんです。」と語つたのは矢追氏である。その後、フレンズ国際ワークキャンプと矢追氏の結び付きから、この村の一角にライ回復患者のための「交流の家」が、付近の人々の反対を押し切つて建設され、現在ではこのあまり広くはない敷地に精薄者や老人のための施設もある。これらのことは、この共同体の眼がどこを向いているのかを明らかにしてくれている。似たようなことは、心境農産に対してもい

えるだろう。村八分にされ、いっしょに共同で生きるより他になかった人々が集まったところが心境農産発生の出発点となっているし、ここでも現在精薄者のための立派な施設を持つているという事実がある。

では、このへだれのための共同体か?との問いをさらに発展させるとどうなるのか。原川氏は最後の感想のなかで次のように述べていた。

「非常に多くの方が、資本主義の社会を批判しておられます。特に若い人々の建設的な前向きの姿勢があらわれてきたこと、それを共同体思想と呼ぶことができます。何かを求めていっしょにやっという動き自体を共同体思想と呼ぶことができると思います。そして、それに答える形で、山岸会だとか一燈園があるのだと思います。このような動きが活発になっていくことをよろこんでおりますし、建設のために働く人々のお役に立てればうれしく思います。」

ここでは、共同体とは、それを求める人々のため、それを必要としている人々のため、という拡大された認識がある。

では、求めている人々をどう受けとめているのか? 山岸会では、特講、研鑽学校を通

して、一燈園では智徳研修会を通してというふうに、それぞれの可能な規模に準じて行なわれている。

そして、この共同体の連帯範囲は、この一年のうちにも一定の拡大があった。それは、コミュニケーションを志向する国外からの人々が、少しずつ日本の共同体の存在に気づきはじめ、それと同時に山岸会や一燈園での生活体験を求めて動きはじめたということのうちに見られるだろう。去年の八月に来日し、日本の共同体を取材した「モダン・ユートピアン」誌編集者と我々とのあいだにコミュニケーションが成立したこと、そして彼らの報告がアメリカでなされることは、この新たな連帯の範囲を広げる役目をしてくれることだろう。我々は、こうした動きにも同時に対応していきたいと思う。もしも共同体がそれを求めている人すべてに開放されているものならば、当然それはあらゆる国の人々に対してもいえることだからである。

山岸会の川瀬氏は「我々が特殊部落となつてはいけな。全体を特殊部落に変えていくことだ」と言ったが、このことは、共同体の将来の在り方と、目標地点がどこにあるのかを言い当てているといえるだろう。

新読者会からの便り

— 広島

……これからの運動の方向と具体的な活動について、話したことを簡単に報告します。集まった者十名のうち活動的メンバーは備北とのかかわりをもつ人です。一月の備北冬期キャンプにも、行ったことのない人を参加させたり、ようやく動き出した備北と密接にかかわることを中心にして活動をはじめようと思います。

また、多様性をもつものとしての〈共同体運動〉を備北以外の都市の共同体も不可欠なものとしてポチポチ手がけたいと考えています。個人個人が、実際的にかつ実用的に、たとえ一人でもやっというようにになりたいものです。それに、理念的な面もしつかりやっというたいと思います。会の名称は「月刊キアツ読者会」で、会合は月一回、毎月第四土曜午後五時より池田敏雄宅でおこないます。……

池田敏雄（広島市青崎一―一

十四 電 82―七七五〇）